

東北支部の創設

学会の基盤は現在の岩手大学農学部の前身である盛岡高等農林学校が創立された 1902 年に始まるが、実際に農芸化学科、農学科第 2 部と改正されたのは 1918 年からである。同学は本学会創立の鈴木梅太郎先生が教授をされ、世界で初めてのビタミン発見の端緒を得られた所として意義深い。1896 年東京帝国大学農科大学を卒業された先生は 1901 年にドイツのエミール・フィッシャー教授の許に留学し、タン白質化学の研究をされ、1906 年に帰国されたが、すぐにこの盛岡高等農林学校の教授に任ぜられた。当時わが国の風土病として猛威を振り、白米病と言われた脚気の原因の研究を始められ、後に遂にオリザニン（ビタミン B₁）を発見された。

新設のため撤去された跡に 1983 年 10 月「盛岡高等農林学校校舎跡と鈴木梅太郎・宮沢賢治を記念する碑」が建てられた。

1907 年 6 月札幌の農学校を改組した農科大学と新設の理科大学を併せて東北帝国大学が仙台に設置された。1932 年に農科大学は北海道帝国大学として独立、分離するに至った。1939 年に東北大学に農学研究所の創設をみたが、第 2 次大戦勃発のため農学部の設置は実現せず、1947 年 4 月ようやく設置されたが、農芸化学は農産学の 1 コースにとどまり、1949 年 5 月ようやく 4 講座で独立を得た。

他に新制大学（農学部）の発足で弘前大学に園芸化学科、山形大学に農芸化学科が設立され今日に至っている。

さて東北大学に農学部が設立され、東大からまず今なお墨黥の藤原彰夫先生が着任され、開学の準備を始められた。間もなく応用微生物の植村定治郎先生、農産利用の麻生 清先生も着任され、藤原先生と共に活動されたが、この 3 人は東大農化で同クラスなので、意志の疎通は早かった。

東北は後に食糧基地などといわれたように第 1 次生産は盛んであったが、しかし第 2 次生産は食品工業ばかりでなく弱体であった。産学協同でこの振興、また農芸化

学の進歩発展が学部設立の目的であったので、まず始められたのが農化金曜会の集まりで、月 1 回金曜日に、農学研究所や諸会社を会場に集まって種々懇談が行われた。集まったのは前記 3 先生を中心に、業界側では仙台味噌醤油の佐々木重兵衛（先代）、鳳山酒造の高木清兵衛、キリンビールの大島義彦工場長ら各氏、支部が設立されてからと思うが福島酒造家荻野精二郎、盛岡岩手川の関口喜兵衛、青森の味噌醤油の和田寛次郎（先代）氏らの参加を得た。

研究成果が次第にあがってきて、この発表が農化金曜会で話題となり、盛岡とも連絡、種々論議の結果、日本農芸化学会東北支部を創立することになった。

1949 年に創立の大会が農学部で開かれ、東北各地の大学や業界の参加を得たが、この時の記録は残念ながら残っていない。翌 1950 年からは整って支部長は岩手大学長の鈴木重雄（生化）、常議員は東北大学農学部長の有山 恒（栄養）、同藤原彰夫、岩手大学農学部長長谷川米蔵（土壌）、鈴木重雄、幹事 有山 恒、志村憲助（生化）の諸先生が役員をされた。

第 1 回の講演会は昭和 24 年 11 月 12 日

パパインの作用機作 東北大農化 志村憲助

東北大学農学部として北六番丁に建物も一応整備され、農芸化学科も移転したので、1962 年全国大会を仙台に迎えることになった。地元としては支部創設の御挨拶の腹づもりで、理事の中西武雄先生は植村先生とともに寄付集めに大奮闘、全国から多数の参加をいただきありがたかった。懇親会もスポーツセンターを借りたが予定の 500 を越え 700 人となり、中西先生の肝煎りで東北らしく民謡や日本舞踊で盛り上げ、酒も十分であった。

1964 年支部創立 15 周年記念として支部大会、例会の記録が刊行され続いて 1979 年 10 月には 30 周年として祝辞、回顧、記念講演会要旨、支部の歩み等を内容とした記念特集が刊行された。

（柴崎一雄）